

昭和43年3月

秋田県文化財調査報告書第14集

胡桃館埋没建物発掘調査概報

秋田県教育委員会



北秋田郡鷹巣町立鷹巣中学校の敷地内に昭和36年の暮、運動場を造成したとき、土師器や須恵器が出土し、遺跡の所在が確認されました。

その後、昭和38年4月同運動場北側に町営野球場を造成するために整地作業を実施しましたところ、埋没されていた櫛木様の貫穴のある木柱などが続いて発見されまして、この遺跡が普通の遺跡ではなく、城櫓跡か、それとも巨大な埋没された建物群か、文献がないだけに研究者の関心の的となりました。

しかしさるに、昭和40年10月、当該遺跡の北側用水路付近の土木工事現場から巨大な材木を使用した建物遺構が発見されるにいたって、この遺跡の重要度が決定的なものになりました。県教育委員会としては、直ちに文化財保護委員会に報告するとともに現地調査を行ない発掘調査を検討しておりましたところ、昭和42年度国庫補助の対象となり、第1次の発掘調査を実施いたしました。

その結果を概報としてまとめ、このたび刊行することになりました。については、研究者はもちろんのこと、広く遺跡の保存に関心をもっておられる各位のご活用をお願いする次第であります。

最後に、調査を直接担当になられた調査員、ご協力された鷹巣町関係者ならびに岩手大学、秋田大学、鷹巣農林高等学校的学生生徒諸君の労苦に対し深甚の謝意を表するものであります。

昭和43年2月

秋田県教育委員会

教育長 伊藤忠二



目 次

I. はじめに	1
II. 遺跡	5
1. 概要	5
2. 調査経過	8
3. 発掘日誌	13
4. 地質	16
III. 遺構	19
1. 概要	19
2. A地区の遺構	20
3. B地区の遺構	20
4. C地区の遺構	22
5. 遺構の考察	24
IV. 出土品	25
1. B地区	25
2. C地区	25
3. 昭和36~同40年の出土遺物	30
4. 植物体	32
V. むすび	35

挿図目次

第1図 藩本埋没家屋実測図	3
第2図 遺跡周辺地図	6
第3図 遺跡現状図	7
第4図 A地区出土木材実測図	9
第5図 A地区遺跡柱状模式図	10
第6図 昭和40年調査実測図	11

第7図 遺跡全体図	12
第8図 菩提盆地第7段丘分布の図	17
第9図 A 2 棚の図	20
第10図 B 2 地区断面図	21
第11図 C 地区断面図	23
第12図 須恵器	27
第13図 須恵器、墨書き土器	28
第14図 木器	29
第15図 昭和36~40年出土遺物	31
第16図 A 地区写真	36
第17図 B 1、B 2 略図	37
第18図 C 地区実測図	38

図 版 目 次

図版1 遺跡の遠景、小ヶ田部落	39
図版2 発掘風景	40
図版3 B 1、B 2、建物遺構	41
図版4 B 1、B 2、建物遺構	42
図版5 C 建物遺構	43
図版6 シラス層の軽石片	44
図版7 墨書きある木器、墨書き土器	45

表 目 次

第1表	1
第2表	18

I. はじめに

秋田県北秋田郡鷹巣町立鷹巣中学校の敷地内に運動場造成工事中、昭和36年の暮、須恵器大型壺と土師器壺が出土した。

越えて昭和38年4月、前記運動場の北に隣接した地域に野球グランド造成工事中に掘立式柱脚六本と付属板材や貯き穴のある角柱等が発見され、この事について鷹巣町の報告に接し、秋田県教育委員会は取り敢えず現地在住の豊島昂に現状の実測調査を依頼した。さらに昭和40年10月、前記運動場の整地付帯工事の為、野球グランドの北に隣接する地域から採土運搬中、刀子、土師杯、木箸、木屑片等が出土すると共に巨大な土居材の一部分がシラス層下からあらわされて注意を引いた。昭和40年、米代川流域の地質調査中の平山太郎、市川賢一両氏もこの遺跡を訪れ、シラス層下の本遺跡について考察を発表した。また富澤泰時の調査によってこの土居上に扉等の部材が存在していることが知られ緊急調査の上露頭部分の実測図が作成すると共に鷹巣町に保管した。ついで昭和41年に文化財保護委員会坪井清足技官と岩手大学板橋源教授が現地を視察したのである。

以上の経緯により、本遺跡の重要性が判明するに至ったので国庫補助を得て、緊急にこの遺跡の性格を究明すると共に3頁要項により発掘調査が実施されることになったのである。
(奈良修介)

1 秋田県における建物埋没遺跡

発掘によって発見される遺跡、遺物は、その多くは地下に埋没されているのが通例であるが、従来、秋田県においては建物遺構の出土が江戸時代の記録にも見られ、その類例の発見が引続いて現在まで為されていた事は注目すべき事であろう。本県における古代建物発見例を表示すれば次の如くである。

秋田県出土古代建物一覧表

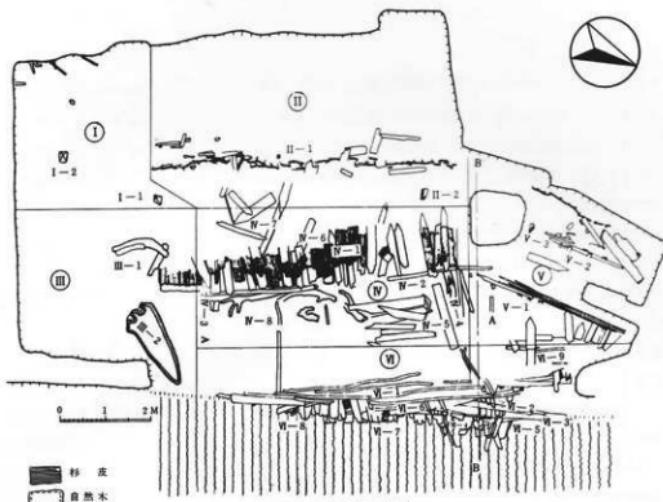
番号	遺跡名	所在地	発見年月 日建物数	伴出遺物	文献・調査者等
1	大城城	大館市城	安永四年 4月 2~4棟	栗・稗・糸杉・文杉・麻の葉・祝翁・ 鷹・瓶子・小鉢 木鋤・船棹(長さ2間) 机・折敷・木舟 筆・祝	菅江真澄 「にえのしがらみ」 (秋田収書) 「桜がり」 (菅江真澄未刊 文献集)
2	向田崖	大館市向田崖	慶応年間 一棟	種子ようの物(曲げ物に入る) 瓶・臼・杵・机・轆轤類	平山・市川 「1000年前 のシラス洪水」 (地質ニュース 140号)
3	板沢	大館市中板沢	寛政5~9年		「桜がり」

番号	遺跡名	所在地	発見年月 日建物数	伴出遺物	文献・調査者等
4	岩瀬	北秋田郡 田代町 岩瀬	5-6棟		佐々木丘一 「北秋田郡史」
5	小勝田	北秋田郡 鷹巣町 小勝田	文化14年 6月4日 2-3棟	六角柱(干支)機器部分・ 木製矢入れ・木箸・串・轆・轤	黒沢道形 「秋田子年瓦」 平田萬周・品田 度考・音江真澄 「新古記號品類之圖」
6	胡桃館	北秋田郡 鷹巣町 子	昭和38年 昭和42年 3棟 柱列・壇列	須恵器・土師器・鉢・坏・壺 木屑・箸・木簡	
7	天神	山本郡 井町 合川宮林 天木場	3棟 土間と床敷 あり、両開きの扉あり	幣(杉)・白・杵・曲げ物 瓶・倒木	北秋田郡史

(以上米代川流域)

8	小谷地	男鹿市臨 本大字富 永字小谷 地	三棟以上 (堅穴式)	井戸(杉厚板組合せ式)家屋構材・矢 板多数・木器・田下駄・下駄・刀子・ 墨書き土器多数磁器片・土師・須恵器	秋田県教委刊 「協本埋没家屋 第1次-第3次 調査概報」
9	飯森	男鹿市飯 森	(建物なし)	円形井戸(桶側式)木器・木製 宗教遺物・漆器片 (鍾乳一室町期)	同 上
10	浦田	男鹿市臨 本浦田		矢板 (平安か)	(未発掘)
11	野田	男鹿市 臨本富永 字野田		矢板 (平安か)	(未発掘)
12	大堤	南秋田郡 琴浜村 大堤		矢板 (平安か)	(未発掘) 斎藤忠・福山 敏男氏等視察
13	角間崎	南秋田郡 琴浜村 角間崎		角材・須恵器 (平安末-鎌倉)	疋村朝次郎・奈 良修介視察

(以上男鹿半島)



第1図

男鹿市脇本埋没家屋遺跡
第1次調査報告より（永井規男氏図）

これ等の発見された建物の中、米代川流域出土の大部分は鹿角郡より米代川を水流によって運搬された火山灰と泥土の混和した所謂シラス層に被覆されたもので、鷹巣町の遺跡の遺構をおおっているシラス層は、豆粒大、またはそれ以下の火山灰の粒子よりなり、乾燥時は灰白色を呈し緊密に硬化して凝灰岩の如くであり、湿润時はやや淡褐色となり、亀裂を生じ、次いで容易に崩壊する。米代川流域の古代建物の発見時もこの雨期のシラス崩壊により建物が露頭したものと考えられる。

（奈良修介）

2. 調査団の組織

1. 発掘調査の主体

秋田県教育委員会

鷹巣町教育委員会

2. 発掘調査期間

昭和42年7月26日より8月15日

3. 発掘調査の場所

秋田県北秋田郡鷹巣町綾子字胡桃館1番

坊沢字上野3番

文化財保護委員会調査官・工学博士(調査指導) 工藤 圭章

4. 調査員

秋田県文化財専門委員 奈良 修介

京都大学教授・工学博士 福山 敏男

岩手大学教授 板橋 源

岩手大学・文部技官 佐々木博康

京都大学・助手 永井 規男

秋田県文化財専門委員 豊島 昇

敬愛学園高等学校教諭 鍋倉 勝夫

岩手県下小路中学校教諭 島 千秋

地質担当

秋田県文化財専門委員・秋田大学教授・理学博士 藤岡 一男

植物担当

秋田県立鷹巣農林高等学校教諭 松田 孫治

調査補助員

岩手大学教育学部学生 川又 正則

態坂 覚

齊藤 哲

加藤 邦忠

鈴木 隆夫

伊藤 八郎

秋田大学教育学部学生 武石 孝

同 杉渕 駿

明治大学文学部学生 船木 義勝

同 菅原 俊行

事務担当

秋田県教育庁社会教育主事 加賀谷辰雄

同 吉川 欣一

秋田県教育庁社会教育課主事 児玉 正路

同 堀井 忠彦

同 山口 哲男

秋田県立美術館学芸員 富樫 泰時

鷹巣町教育委員会社会教育課長

松尾 精一

なお出川町長 成田喜八（前鷹巣町長） 渡辺勝哉（鷹巣町教育町） 新田恭平（町土木係長） 武内正俊（町教育委員） 三日田武男・豊村政吉（NHK） の各位外・地元多数の方々及び県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部員（顧問戸島勇教諭・木村良一・杉山中・渡辺信夫・齊藤光幸・横溝時義・畠山三一・高橋幸男・和田喜博・長室男）・県立金足農業高等学校社会部員（児玉精太郎・田口正・伊藤盛栄）の諸君・県立由利高等学校教諭木崎和宏及び引率の同校生徒六名・岩手大学付属中学校教諭木村幸治の諸氏に多大の援助を頂いた。なお出土遺物中の赤外線撮影については秋田県警察本部鑑識課の多大の御援助と御配慮を頂いた。ここに銘記して厚く謝意を述べる次第である。
（奈良修介）

II 遺 跡

1. 概 要

遺跡は秋田県北秋田郡鷹巣町綿子字胡桃館1番地、同鷹巣町坊沢字上野3番地にある。この地域は、所謂鷹巣盆地の北よりの盆地床にあって、標高約28m前後を計る。

遺跡の南2km程のところを米代川が西に流れ、少し下流で南から北流して来た阿仁川が合流する。これらの川の合流等によって形成された沖積盆地といわれる。

この地域に統合の町立鷹巣中学校が設立されたのは昭和35年であった。そしてこの学校の、また町営のスポーツセンターとしてグラウンド・トラック・テニスコート・バレーコートその他の施設が作られることになり、昭和35年頃から整地作業がおこなわれたのである。昭和36年にはその整地作業中、須恵器等が発見されている。

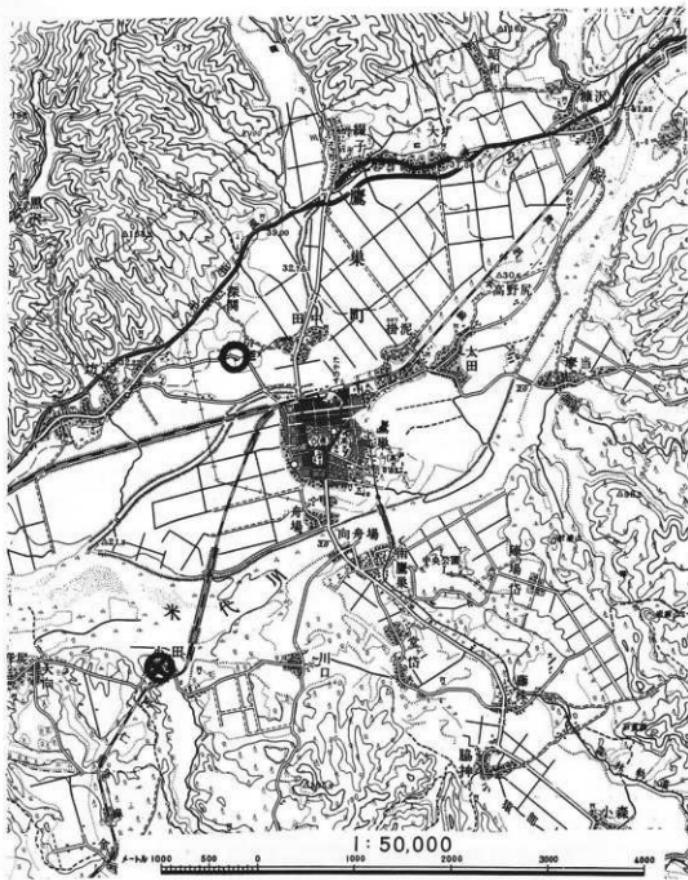
現在はこれらのスポーツ施設が、遺跡（A地点）を含むその北方に出来あがっている。A地点はこのスポーツ施設の一一番北にあるグラウンド内になっている。グラウンドの北約30m程で水田となっている。水田とグラウンドの間が荒地となっていて、水田から流れた水が、C地点を東流し、B地点で南に流れ中学校の西を通って南に流れている。この堰にB、C地区の遺構が露出していたのである。第2図○印がこの胡桃館埋没建物遺跡である。（図版1参照）

○印は小ヶ田部落である。部落のある台地は米代川の河岸段丘で、標高約30mあり、現在水田となっている。

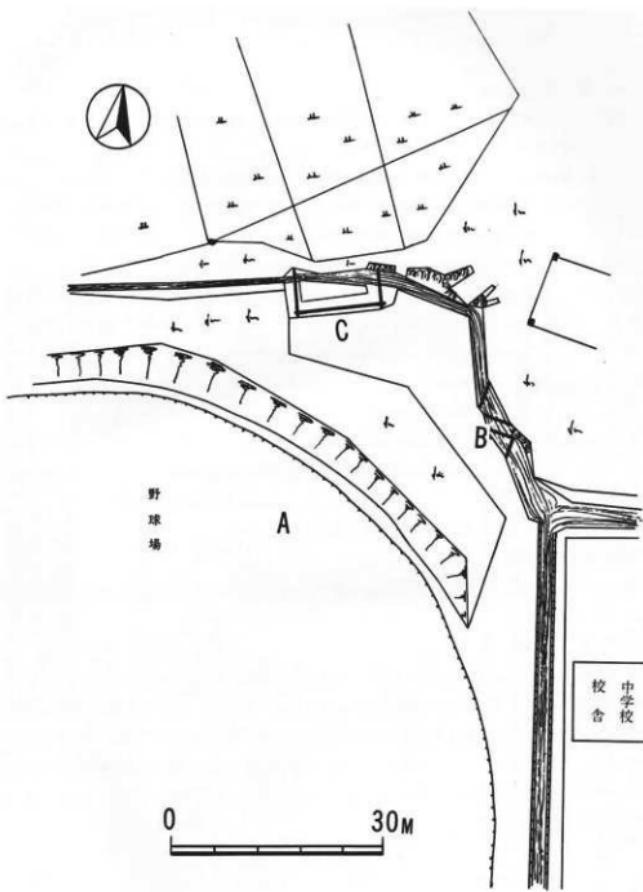
江戸時代菅江真澄の「筆のままで」（菅江真澄未刊文献集、「桜がり」、内田武志編）や、平田篤胤の「皇国度制考」（文政4年）、また黒沢道形の「秋田千年瓦」（文政6年）などに記されている部落と考えられる。

調査中、小ヶ田部落の中島政之助氏を訪ね家屋遺構の出土した地点等を聞いたが不明であった。だが中島氏の話しでは今でも埋木が各所から発見されるとのことである。（図版1参照）

遺跡の北の丘陵上には土師器、続繩文、繩文土器などが出土する遺跡が点在する。



- 印は胡桃館遺跡
- ⊗ 印は、江戸時代建物遺構が出土したと伝えられる小ヶ田部落。



第3図

胡桃館遺跡現状図

2. 調査経過

胡桃館埋没建物遺跡が世に出たのは昭和36年頃からであった。それから今回第一次発掘調査に至るまでの経過の大略を年表にすると下記の如くである。

昭和36年暮 鷹巣町営グランド整地中、須恵器大ガメ、土師器鉢型土器発見。

昭和38年4月9日 同地町営グランド整地中、本の円柱発見、豊島昂調査。

* 10日 県文化財専門委員奈良修介現地調査。

* 13日～14日 県立鷹巣農林高校郷土史研究部豊島昂指導により実測。

* 9月 豊島昂「北秋田郡鷹巣町立グランド発見遺跡」と題して秋田考古学22号に発表。

昭和40年4月 県立鷹巣農林高校郷土史研究部現地視察、壇の北側シラス層より須恵器壺発見
この年、遺跡付近より刀子採集鷹巣町教育委員会で保管。

昭和41年10月～13日～14日 鷹巣町営グランドの北側で土取作業行なう。その時、土居、扉（C地区）
発見、富隈泰時調査実測。須恵器壺1個発見。

* 10月23日 県文化財保護委員会 専門委員奈良修介現地視察

* 11月1日 文化財保護委員会調査官坪井清足氏岩手大学教授板橋源、県社会教育課加賀谷辰雄
等視察

* 11月8日 文化財保護委員会調査官鈴木嘉吉氏視察。

昭和38年の調査概要

昭和38年グランド造成中に発見された柱列は二群で、一つは円柱群で、他は櫛列とも云うべき柱列であった。

1. 捜立円柱列

は「東西線上にある六本で、この六本は更に三本を単位に構成される。東から、東1・2・3・西1・
2・3と呼称している。東2と西2の距離は約11・9mある。東1・3・西1・3にはそれぞれ10cm×
45cm前後の貫穴が穿かれ、方向は東西線に平行する。2東・西・は貫穴をもたず前記の円柱のそれぞれ
中央に位置し、千鳥となる。これらの円柱の内、発見届出前に東1・3・西1・2は切断されていた。
写真は切断された円柱を元にかえしてみたものです。切断をまぬかれた二本の柱（東2・西3）は、そ
の後掘り上げられ保管されている。

東2円柱

長さ・現存 3.2m

柱根径 0.7m

上部径 0.43m

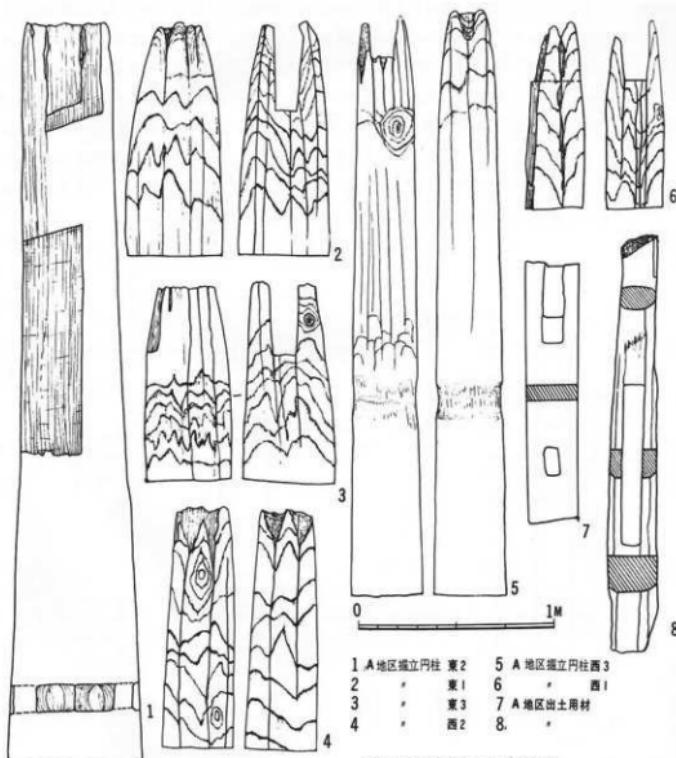
発見された円柱中最大のものです。柱根にはいかだ目が穿かれている。38年調査では、図4の2に見
られる用材が柱北側に接し、貫穴には貫材が通され円柱を挟むようになっていた。

西3円柱

長さ・現存2.9m

柱根径 0.37m

上部径 0.25m



第4 図A 地区出土木材実測図

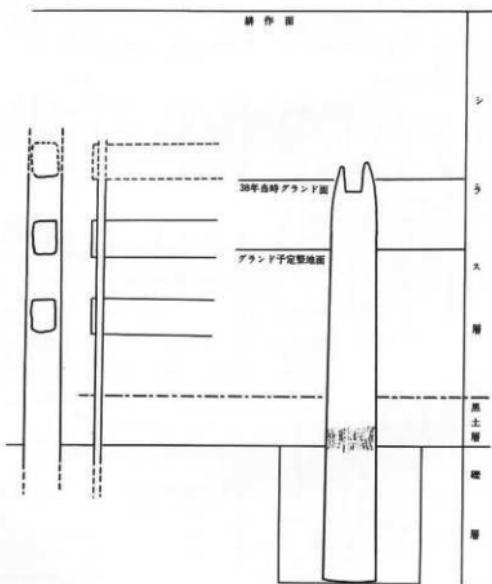
柱の上部には貫穴がある。柱根部より 1 m のところに巾約 20 cm の磨滅痕が一周する。遺跡柱状模式図では、往古の地表面と接する点とみられる。

ロ. 捩立柱列

38年の調査の際に、前記円柱列より西北方に約 15 m はなれて東西線よりや、西北方に弯曲した柱列が発見された。図版 16 図 3 でも知られるように一部は水田下にも延長しているので全長は不明であるが、柱間三間は確認されている。東側は西円柱列の北で切れている。西側は水田下となる。(42年度の調査においては新たに四間が発見され、計七間、35.5 m まで追跡することが出来たが) 西側は更に延長するものと予想される。柱は厚さ 5 cm × 巾 20 cm の板状のもので柱間は 4 m ~ 5.8 m の間隔を保っている。柱には 30 cm 間隔に 20 cm × 25 cm の貫穴は現在三段を数えることが出来る。尚柱は上部で切断されているため貫は三本以上通されていたと推定される。貫材はそれぞれの柱間より 20 cm 前後長めで、厚さ 5 cm × 25 cm となっている。この柱列は棚と推定される。遺跡柱状模式図は 38 年に作成したものをおもに訂正したもの。

(豊島記)

耕作面



遺跡柱状模式図

第 5 図

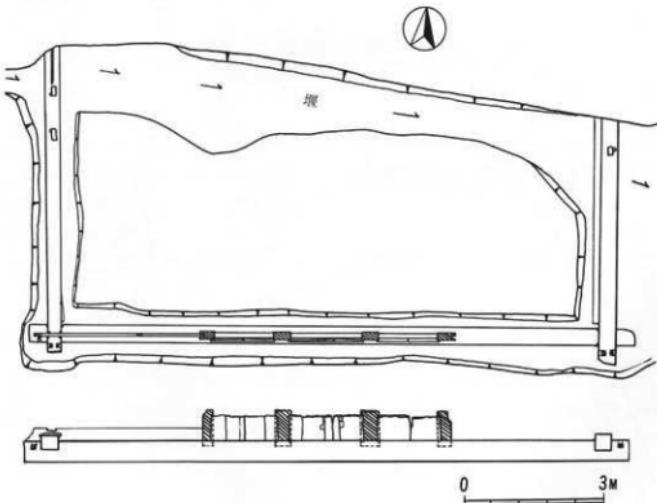
昭和40年の調査の概要

昭和40年に調査した地域は、今度の発掘調査でC地区と呼ばれたところである。当時は東西に走る水路に2本の土居が出ていただけであった。それが同40年10月、町役場でこの地で土取り作業をおこなうことになり、それにともなって調査したのである。

調査の結果、下図の如く、南側に3ヶ所の扉をもつ建物遺構が発見され、水路中に出ていた土居と同一建物であることがわかった。

土居は断面35cm×39cmで、長さ（桁行）11.8mあった。両端に目途穴があけられていた。土居のはじめ中央に柱が4本（3間）あって、その柱間は、中央が151cmで広く、両側が127cmあった。柱の間に断面10cm×10cmの扉放があり、その外側に厚さ5cmの扉が立てられていた。扉はすべて外方へ開く、両開きのもので、その軸置穴は直接土居にあけられていた。中央の扉板は栓で繋が（直径5cm・深さ約2cm）れて居り、両脇の扉板は一枚板であった。現在残っている扉の高さは約60cmである。壁板は断面3cm×28cmのもの2枚残っていた。いづれも南西のもので下段の壁板は動かすそのままの位置にあったが、1枚は流れて建物の内部に入っていた。

梁間は東側が4m=90cm、西側が6m程発掘したが北側が水田で調査できなかった。東西に各々1ヶ所の出入口があった。出土遺物は須恵器1ヶ、建物内西南隅から出土した。



昭和40年調査時の実測図 第6図

第一次発掘調査概要

まず発掘区は昭和38年発見されたグラウンド内をA地区、グラウンドの東北水路の建物遺構をB地区
昭和40年調査された建物遺構をC地区とした。（第7図参照）

A地区

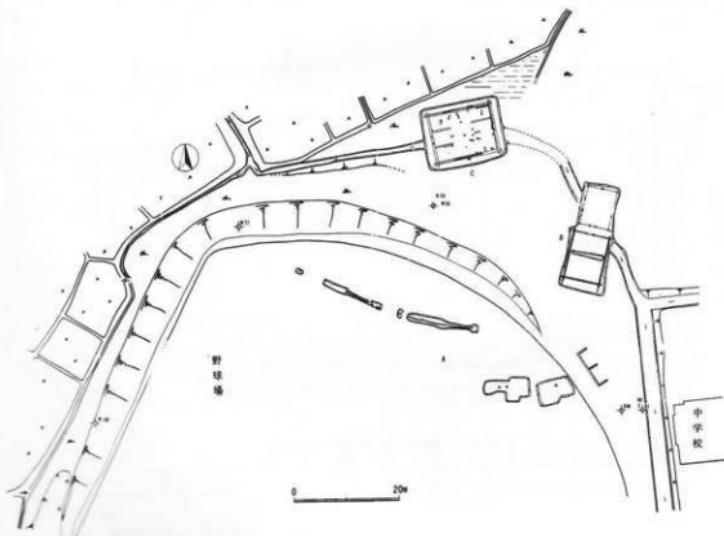
昭和38年の調査で2ヶ所に遺構が発見されている。1つは6本の掘立柱列と、その西北に棚状をなす（東西に弧状に走る）遺構である。前者をA 1、後者をA 2とした。

発掘面積はA 1が約50m²、A 2が40m²である。発掘地区がグラウンド内で、調査の前半は少年野球大会があり、発掘調査を開始したのが8月9日であった。そのため今回の調査では昭和38年の遺構を確認し、実測するだけにとどまった。出土遺物はなく、地層は整地のため擾乱されており、遺構A地も一部破壊されていた。（40年度調査、遺構A地区参照）

B地区

建物遺構2棟発見された。北側の建物遺構をB 1、南側の建物遺構をB 2とした。

B 1は北東隅が水路に露出していた。ここから発掘をはじめた。その結果、桁行7.2m、梁間5.5m



第7図 遺跡全体図

現地表面より約2m近くあった。この間の土層は全てシラス層であった。出土遺物は机、須恵器が数点出土した。

B2はB1の直ぐ南に発見された。この遺構の大きさは桁行8.8m、梁間6.7mの建物で南、東、西に扉があった。扉は全部内開きで、南側だけ少し広い。土居は断面18cm×17cmで、その上に柱、壁板が残っていた。B1、C等の壁板より保存がよかった。出土遺物は少なく須恵器が1点出土したにすぎない。発掘の日時の関係で完掘することができず、そのため全体の実測図も未完成で第2次の発掘で報告する予定である。発掘面積はほぼ160m²である。

C地区

水路に南北に走る土居が2本昭和38年頃から露出していた。この南側を昭和40年に調査している。これらの結果をもとに南側から発掘をはじめた。発掘の結果桁行11.8m、梁間9.0mの建物遺構が発見された。断面35cm×39cmの土居があり、その上に柱、壁板が残っていた。扉は南に3ヶ所、北に2ヶ所、東西に各々1ヶ所あった。いずれも外開きのものであった。南北の扉が残っていて、東西はすでになかった。南のそれは全部閉じた状態で発見された（昭和40年調査）。北の扉は東のものが半開き、西のものは閉じた状態であった。壁板は南面の一部と北側に残っていたが、腐蝕して保存状態が非常に悪かった。床面から木材を東西に意識して敷いた状態で數本発見された。その他床面から須恵器、木器など多数発見された。発掘面積はほぼ180m²。

3. 発掘調査日誌

7月26日（水）晴

午後1時工藤文部技官、板橋教授はじめ調査関係者、鷹巣公民館に集合。打合せ会議。1日の可動人物判明。鷹農生徒6名。器材一輪車三台等。終了後現地巡査し宿舎「清風荘」に入る。午後4時半より町首脳部と懇談会。加賀谷社教主事櫻秋。

7月27日（木）晴

岩大班、佐々木、島調査員測量抗打。C地区鍋倉調査員等除土作業開始。一輪車三台、其他渡り板等準備す。

7月28日（金）晴

岩大班杭打終了しB地区に着手

B地区 水路中に木材の見える地点を選び水路を迂回し排水路を掘り、発掘開始す。

C地区 除土作業進み北面に腐蝕した扉あらわれる。写真撮影及び測図。豊島調査員到着。記者会見午前10時より、調査予定について。

7月29日（土）晴

B地区、板材、次第に四面にあらわれ、建物跡の形状になる。

C地区、土台面までの掘り下げ継続。ベルトコンベアー到着。

7月30日（日）晴

B地区、継続作業。

C地区、土台面までの除去を終え、内部にトレント2本入れる。金農高生嵯峨、伊藤君参加。吉川社
教主事、堀井主事帰宅。

7月31日（月）晴

B・C地区共に継続作業。金農高生小玉君参加。金農高生3名帰宅。

8月1日（火）晴

作業休み。富樫県美術館学芸員到着。

8月2日（水）晴

B地区、継続作業。

C地区、床面清掃作業。北東隅外側より、須恵器壇発見。その他須恵器破片1。山口主事到着。

8月3日（木）晴

B地区、床面まで5cm程剥ぐ。南側に入口あらわれる。本日より、B地区の北の建物をB1、南の建
物をB2とする。B1の内部に小円形の遺構発見。

C地区、床面まで掘り下げ継続。断面図の作成にとりかかる。

午後ブルドーザー1台到着。B2及びグランド（A地区）の表土を除く。藤岡地質担当調査員来る。

8月4日（金）くもり時々雨。

B地区、B1外周の除去作業。

C地区、排水及び南面外側の除去作業。

排水用井戸を外側に掘る。永井調査員帰洛。奥山潤氏見学。

8月5日（土）くもり

B地区、B1東側の除去作業。

C地区、夜来の雨により北部水田面よりの流れ激しく、一日中排水作業。南北に走る断面図作成。午
後ベルトコンベアー1台追加、岩大生加藤邦忠君到着。

8月6日（日）晴

B地区、B1、B2共に除去作業。

C地区、排水及び床面掘り下げ。須恵器破片発見。明治大学生船木義勝君到着。B地区に加わる。ベ
ルトコンベアー1台加わり、計3台となる。奥山潤氏見学。

8月7日（月）晴

発掘作業休み。 調査員、富樫学芸員等、江戸時代建物跡等発見された小ヶ田部落を踏査。部落の人

達にいろいろ聞けどその地点はっきりせず。部落の遠景写真をとり帰宿。

8月8日（火）晴

B地区、B1内外共に床面まで掘り下げ作業。

C地区、床面を出す。遺物出土す。木器1、須恵器完形2、破片2。

午後3時記者会見。中間発表する。鷹巣町郷土史会員見学、富澤学芸員、山口主事視察。

8月9日（水）晴

A地区、豊島調査員等、A地区調査開始。

B地区、B1地区清掃、内部西側に坑を発見。

C地区、床面まで掘り下げ作業継続。中央部北面寄りに円柱状の低く切断されたもの現わる。また須恵器破片1ヶ分出土。

工藤技官到着。加賀谷社教主事、小玉主事到着。奈良環之助文化財専門委員長、新野直吉秋大教授、武内鷹巣町教育委員視察。

8月10日（木）晴のち雨

A地区、中央部、柱の周辺を掘り捨てる。

B地区、B1地区、B2地区掘り下げ作業継続。B2から屋根材様のもの出土。

C地区、中央部残存壁の撤去、出土土器約27個、墨書きある木器出土。赤外線写真撮影の為、県警鑑識課へ野呂田県社教課長補佐持参。鷹巣町々長、同教育長視察。

8月11日（金）

A地区、柵木2ヶ所確認（再発掘）、柵板出土。

B地区、水没の為、排水作業。

C地区、排水作業。土台の廻り及び下の土の掘り下げ。須恵器14点、木器4点出土。福山調査員到着。木村県教育次長、寺田社教諭長、菅原係長視察。大館桂高校井上富美教諭外生徒20名、由利高校木崎和広教諭外11名見学。

8月12日（土）晴後雨。

A地区、垣列を西北に追求。

B地区、B1は排水作業。B2は排水及び土台まで除土作業。

C地区、排水及び佐々木調査員による測量の為の丁張りを設ける。木崎、木村教諭測量作業に参加す。鷹巣町民多数見学。

8月13日（日）雨。午後豪雨。

A地区、垣列追求。

B地区、B1、B2共に除土作業。

C地区、排水と実測作業継続。

記者会見、雨の為鷹巣中学校々長室に於て実施。各社記者及び成田県議、町議会議員(木村喜八氏外)渡辺教育長、松尾公民館長、成田前町長、奥山潤氏等多数出席。中間報告。印刷説明す。工藤技官福井。明治大学荒木氏外学生2名見学。

8月14日(月)小雨後くもり。

A地区、排水清掃の上撮影。

B地区、B1、B2排水後、内部残存壁を除去作業。

C地区、実測継続。立教大学中川教授視察。午後6時より懇談会。

8月15日(火)午前中豪雨午後くもり。

各地区ともに実測、写真撮影。部材の浮いているもの全部撤去。公民館に収めることになる。記号を付す。横中電燈を照して、実測班は夜間にまで作業が及ぶ。板橋、島、豊島各調査員帰る。木村良一鷹巣農林高校郷土研究部長手不足のため宿泊して整理す。加賀谷、児玉、松尾等、関係者に調査修了の挨拶通り。

8月16日(水)豪雨、

雨中、各部材の収納すべきもののグランド東道路まで搬出。各器材の点検搬出し公民館長に引継ぐ。午後1時調査団残者解散。

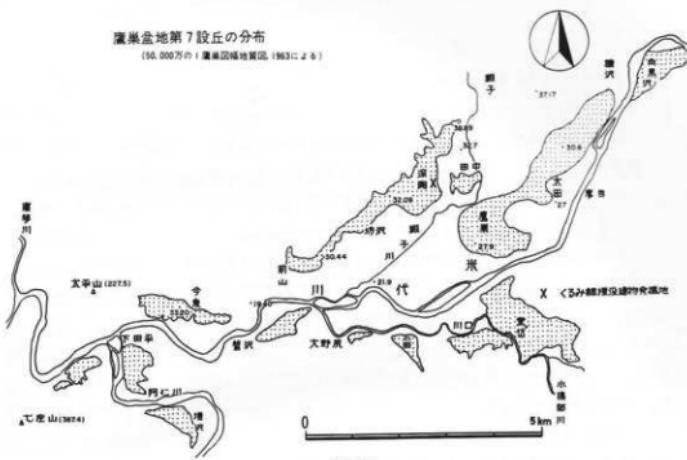
4. 地 質

胡桃館埋没建物遺構を埋めたシラス層

くるみ館遺構が発掘された鷹巣中学校付近の台地は30m段丘で、沖積平地より10m程高位にある。この段丘は第七段丘(平山次郎・角清愛、1963)と呼ばれ、米代川流域の広域段丘群の最下位段丘である。

くるみ館遺構の家屋基礎面は段丘堆積物(古い沖積層)上にあり、現在河床面よりはかなり高く、当時の河床面よりはやや高い位置の平地であったとみられる。この堆積物の組成は礫・砂および泥よりもなり、や、炭化した植物片を含み、わずかに軽石を混えている。遺構の全体がシラス層によって埋められている。その厚さは発掘地では平均1.3mであるが、その後の久しい期間における剥削があったであろうから、実の厚さはもう少しあったと思はれる。このシラス層の基底部は軽石片に砂礫が混合し、多量の植物片を含んでいるが、上方へはほとんど軽石片(粒径1mm以下)の堆積で、これに真珠岩片・火山グラス・火山灰・砂・砂鉄・鉱物粒・植物片などを伴うもので、わずかに水平層理を示し、水の淘別作用をうけている。軽石細片は水磨されたもの、角礫のものなど区々である。色は白っぽいが、少量の有色鉱物を含む。紫蘇輝石が認められるが角閃石はない。磁鐵鉱は普遍的に含まれている。

岩石学的には輝石英安山岩質浮石である。



第8回

この浮石層は第七段丘の主要構成物であって、第8図に示すように鷹巣盆地の周縁に広く分布する。これを上流に追跡すると十和田火山にさかのぼり、下流に追うと米代川沿ひに能代（地下）に達し、日本海岸に沿って浅い内付近（地下）まで拡っている。すなわち、この浮石層は十和田火山噴出物である多量の浮石がシラス洪水となって一時に米代川を流下し、流域の地表物を押流し、あるひは埋没したものである。この浮石層は米代川に注ぐ支流や谷沢の河口よりさかのぼって分布し、33 = 高度以上まで堆積しているから、軽石流の水位はかなり高く規模の大きい洪水であり、その水害も当然大きかったと想像される。

平山次郎・市川賢一（1966）が考証したように、このような規模の洪水は明治以来経験した何れの洪水よりもはるかに大きい。しかも昔は原始林が広て出水調節が自然的に行われたであろうから、このような異状洪水の発生は考えがない。多量の軽石熱流に台風などによる豪雨が加ったにしても支配水位が高すぎるようである。さきにも述べたように、浮石細片の集合体で、わずかに堆積層理を示していることより、鷹の巣盆地が一時的に潤化し、流水が停滞したために、水位が高くなり水速の衰えによって多量の浮石片の堆積が行われたと考へることが妥当とみられる。すなわち、米代川筋には両岸の岩石強度や地質構造により、河流が開析しがたい部分が点々とあり、そこは河道が狭くなっている。鷹の巣盆地の上流では、大館盆地との間に、早口および長坂の狭窄部があり、下流では阿仁川との合流点から

藤琴川合流点までの七座隧道がある。この隧道は多量の洪水が一度に流下した時に堰止めの役をなし、はききれない水は逆流して盆地をひたし、湖水化するので水位は極めて高まり、水速は衰へるから運搬して来た浮石片は沈積する。くるみ館発掘地は湖水化したために埋没した位置とみてよいと思う。かように考へると、当時の河道より高位にあった建造物のうち、軽いものや、抵抗の弱いものは浮いて流れ去ったであろうが、重いものや水流に勝った抵抗物は埋没後世に遺ることになる。同時に上流より運んできた物も浮石と共に沈積し、シラス層に含まれてよいことになる。古くよりシラス層よりは広汎にわたって種々な遺構や遺物が見出されているが、今後も次々と発見されるであろう。

鷹巣町大野尻の軽石層下の下敷木片のC₄法による測定では1280—90年という値が知られている。今度発掘された木材で絶対年代を測定すれば経年数がはっきりするであろう。

藤岡一男、佐藤久（1953）や平山、市川（1966）の調査によれば、繩文後期と考証されている大湯環状列石文化層（約50cmの腐蝕土層）は2枚の軽石層に挟まれている。下位のものは十和田軽石層と層とされ、十和田外輪山形成時の噴出物とみられ、上位の軽石層は大湯軽石層と称され、十和田御倉火山の噴出物と考へられている。奥山潤、安保彰（1963）によれば、この地方で大湯軽石層は弥生式土器を含む腐蝕土を覆い、大湯軽石層及びこれを被る腐蝕土には土師式土器が含まれているという。したがって、十和田軽石層は繩文後期より古く、大湯軽石層は弥生時代より新しくて土師器時代ということになる。両軽石層は見掛上同じようであるが、軽石の鉱物組成からみると、古い十和田軽石は石英が多く、それに角閃石を含んでいるが、大湯軽石は角閃石を含まない。その点で鷹巣でのくるみ館遺構を埋没した軽石層は大湯軽石層と同性質である。

昭和39年（1964）工業技術院地質調査所で能代浜に層序試錐（深度3,514.4m）、次いで翌年秋田県が能代市落合で石油・天然ガス試掘（2,300m）を行った。これらの堆積記録をみると、能代浜では深さ22m—70m間、落合では深さ27m—50m間が浮石片を主体とするシラス層で、このシラス層は泥層を挟んで上下に分けられる。この泥層には植物片が多いが放散虫、蛙藻、有孔虫などの遺骸を含み海成の堆積物である。岩石学的な調べはないが、恐らく上位の軽石層が大湯軽石層なわち“くるみ館遺構”を埋めた軽石層に連るものであろう。これらの層序関係は第1表に示す通りである。

第2表

能 能 代	鷹 巣 巣	大 付 近
上 部 シ ラ ス 層	くるみ館 遺構を埋めた軽石層	大湯軽石層（土師器含有）
下 部 シ ラ ス 層		弥生土器含有土 大湯環状列石含有層 十 和 田 軽 石 層

参考文献 平山次郎、角清愛：5万分の1地質図鷹の巣団幅および説明書、地質調査所、1963、平山次郎、市川賛一：1000年前のシラス洪水（発掘された十和田湖伝説）、地質ニュース140、1966、藤岡一男、佐藤久：地学より見る大湯町環状列石、埋蔵文化財発掘調査報告第2、文化財保護委員会1953、奥山潤、安保彰：十和田湖南部（小坂鉱山）の弥生文化とその後続形態（上）、考古学雑誌、第49巻、第2号、1953

III 遺構

1. 概要

今回の胡桃館遺跡の発掘調査で確認できた遺構は、掘立柱6本・柵1列・建物3棟である。遺跡は発掘調査上、南北からそれぞれA・B・Cの3地区にわけられた。A地区は、鷹巣中学校のグラウンドに属する地域、B地区はこの北に接する帯状の、グラウドと水路にはさまれる地域、C地区は水路の北の水田地帯である。遺構はこれら3地区からともに発見されている。

A地区で発見された遺構は、3本の掘立柱が、底辺の広い二等辺三角形状に配される2組のA1掘立柱群と、その北に約11m距てて、東西に連なるA2柵の2遺構である。B地区で発見された遺構は、2棟の建物で、柵の北約10m距ててB2建物、その北にB2建物と同一軸線上に1.4m距ててB1建物が並ぶ。C地区では、B1・B2建物の西約15m・B1建物の北約10mでC1建物が発見されている。C1建物はB1・B2建物とやや方位が異なっており、南北軸が北でやや東に偏している。なお、遺構の番号は、その地区で発見された順に命名したものである。

これらの遺構は、すべてシラス層から発見されたが、シラス層の分布は3地区とも必ずしも同じ様相を示していなかった。

A地区は昭和38年にすでにグラウンドとして整地されたため、遺構上層は削平土および盛土で擾乱された状態であった。とくに、この整地工事が、ブルドーザーを使用しておこなわれた関係上、一部遺構の破壊されたものもあり、また、遺構そのものが、擾乱土から検出されるものもあった。なかには、シラス層が全く削りとられてしまって、遺構がシラス層の下層である黒色粘土質土からのみ検出されるものもみられた。

層序がもっともよく保たれていたのはB地区であって、40cm厚の表土層の下に、B地区南部では密なシラス層が130cm厚ほどあり、この下が黒色粘土質土になる。一方、B地区北部は、表土と密なシラス層の間に、60cm厚の粗いシラス層が残されていた。B地区は北から南にかけて、現地表が緩く傾斜していたので、北部の方に粗いシラス層が残ったのであって、南部では、すでにこの層が削りとられたようであった。ところで、遺構が検出された層は、密なシラス層のみからであって、B地区北部でも、粗いシラス層には遺構はなんら埋没されていなかった。このことから、上層の粗いシラス層は、遺構埋没後堆積されたものと推定したのである。

C地区では、密なシラス層と黒色粘土質土は同様存在したが、シラス層上は直接水田の耕土であり、粗いシラス層はすでに削平されて耕地化されたとみなされた。遺構はB地区と同じく密なシラス層に埋没されて検出されたが、B地区に比べると遺存状況は悪く、遺構上部は褐色の腐植土状に痕跡として検出されている。なお、C地区では、水路がかつてより北にあつたらしく、現水路の北の部分の地層は侵されていた。

2. A 地区の遺構

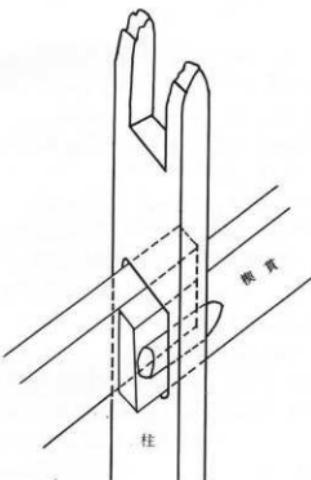
A地区で発見された遺構はA 1 挖立柱群とA 2 檻である。

A 1 挖立柱群は6本の円柱掘立柱よりなる。それぞれ三角形状に2組の柱群が配されるが、南側の4本は、上部に15cm×35cm以上の方孔が穿たれている。これらの掘立柱は、径が40cmほどであり、方孔には貫材が通されたようであって、各孔は一線上にならんで穿たれている。北側の2本は、南側のものよりも大きな径の掘立柱であり、上部には方孔が穿たれていない。これらの柱は、昭和38年にすでに発見されたものであって、今回あらためてその位置を確認したのであるが、当時発見された際には、北部の柱には口状に柱のまわりに板が添えられていたという。グラウンドの整備にともなって、これらの柱は一部抜きとられ、あるいは切断されたが、それらはすべて鷹巣中学校に保管されている。現在保管中のものには、径70cm、長さ390cmほどのものがあり、北側の掘立柱であったといわれている。

A 2 檻は、A 1 挖立柱群の西北で発見されたもので、東西にやや弧状をえがいて連続している。櫛柱は断面5cm×20cmで、4~4.5m間隔で配される。今まで発見された櫛は、柱間7間分、延長35.5mに及んでいるが、なお西に伸びるようである。櫛柱には40cm間隔に貫孔が3所穿たれており、最下の貫孔には5cm×15cmの貫材が遺存していた。貫は図に示すように各柱間に東西から貫孔に通され、楔で締められていた。櫛柱の上部はすでに腐朽していたので、当初の高さが不明であるが、遺存するもので1.4mになる。

3. B 地区の遺構

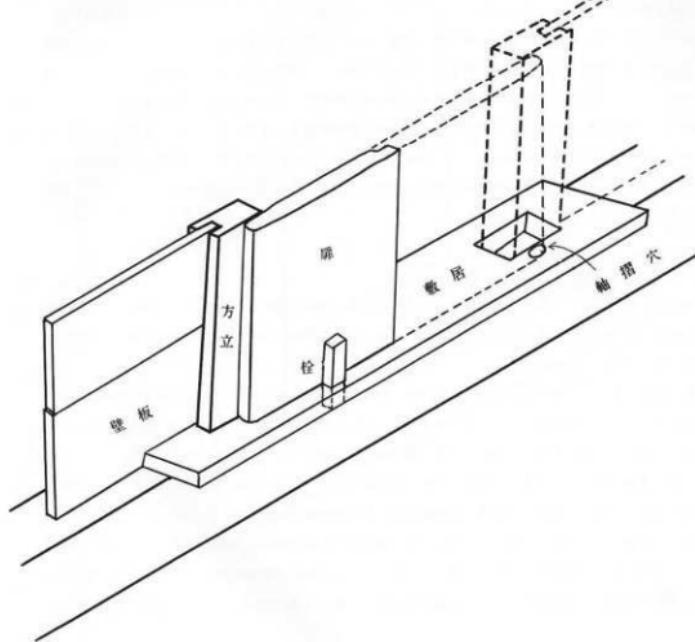
B地区で発見された遺構は2様の建物（B 2・B 1）であり、いずれもシラス層から東南方に壁体が傾いた状況で検出されている。埋没していた部分は、何れも壁体以下の部分であり、桁・梁・屋根などの建物の上部構造は遺存していなかった。また、限られた調査期間の後半には、降雨が多く、床面の詳細な調査は今後にもちこされている。



第9図

B 2 建物は、桁行 8.8m、梁間 6.7m の南北棟の建物である。旧地表上に18cm×17cmの断面をもつ土居を据えその上に巾30cm内外、厚さ5cmの板を屋根をいれて、井籠上に組上げ、横板壁としている。土居および壁板は、陽でそれぞれ渡廊になり、壁板は4段分造存していた。建物の東西南の3面には、内方に開く間開きの扉をもつ開口部が各1所設けられ、南面の開口部は103cm、東西の開口部は93cmで、南面のものが広い。また、土居も南に突出する端部が、他のものより長く、この上に板を渡し、浜縁状のものが設けられたと推測される。したがって、この建物は南を主要な出入口とし、南面でいたものとみなされる。開口部の装置は、土居上に敷居をおき方立柱を立て、敷居上に軸摺穴を穿って扉が吊られている。扉内側には戸締りのための栓が敷居に落とし込まれている。各扉は厚5cmほどであり、召合せ部は合決りになっている。これらの開口部は、すべて単なる出入口とみるとよりは、窓としての用途をあわせもったとみなすべきであろう。

B 2 建物内からは、断面10cm×13cmほどの角材が3本発見されている。いずれも原位置になく一端が



第10図

浮き上った状況で発見されているが、根太材とみられる。この上に床板と思われる板が敷居下に压しつけられて発見されている。根太材の側面には焼痕が認められているが、この建物はあるいは一部床張り、一部土間であった可能性もありえよう。

B 1 建物は、桁行 7.3m、梁間 5.5m の南北棟の建物であり。B 2 建物と同一軸線上に真を描えて配されている。B 1・B 2 建物間の距離は 2 m ならずであり、B 1 建物の東南隅と B 2 建物の東北隅には、A 地区の A 2 棚と同様の棚柱が、それぞれあい対して立てられている。柱には貫孔が 40cm 間隔で 3 所穿たれており、両建物を棚でつなぎていたと思われる。このような棚や、軸をともにする配置などから考えると、B 1・B 2 建物は一対としてつくられたものとみなせよう。B 2 建物の東南隅にも同種棚柱が発見されている。

B 1 建物は桁行柱間 3 間、(8 尺等間) 梁間 2 間 (9 尺等間) で、隅の 4 本の柱は粗雑な八面取りの径 12cm ほどのものであるが、他の柱は 17cm × 10cm の方柱である。南面中央西寄りには、内方に開かれた両開きの扉をもつ 82cm の出入口が設けられているが、扉は遺存していない。この扉口は敷居をもつものであるが、敷居は地表より 20cm ほど高い位置にあって、踏込みの出入口となる。壁体は巾 20cm 内外、厚さ 2cm の薄い壁板を 12~15 枚ほど立て並べたものであって、各板は仕口をつくらず、直接突きつけ並べている。このため、一部では隙間ができるのを防ぐ目的で、やや巾のせまい板を目板として重収て並べている部分もみられる。柱や壁板は地面を溝状に掘って根もとを埋めて、ともに掘立てられている。

なお、建物内では東面の壁体に沿って、数枚の板材などとともに、机が浮上して壁面に压しつけられた状況で出土している。また、出入口の北東では円状に小木を埋めたてた設備がみられるが、その性格は不明である。

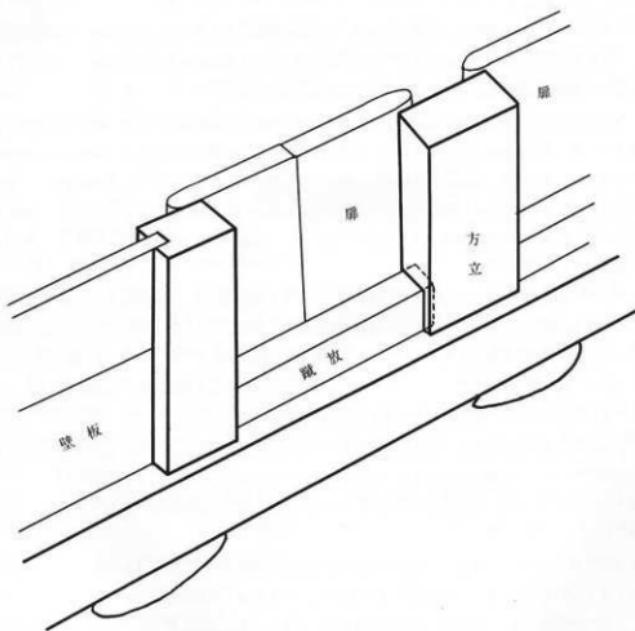
4. C 地区の遺構

発見された遺構は C 1 建物 1 棟であるが、前述のように遺構上部の腐朽が著しく、痕跡としては壁板 4 分段検出したが、形のある壁板として遺存したのは、遺存状態の良好なところでもわずか 2 分段残るだけであった。

C 1 建物は桁行 11.8m、梁間 9.0m の東西棟の建物で、構造は B 2 建物と同様である。土居は、數か所径 40cm ほどの玉石を据えた上のせられており。梁行と桁行の土居は、それぞれ渡鰲で組まれるので、上木になる土居（梁行方向）は地表との間に隙間ができ、面戸として角材がおかれていた。土居の大きさは B 2 建物に比べより大きく、35cm × 39cm の断面であるが、壁板は同じ 5cm の厚さしかない。開口部は南面中央に 3 か所、北面に 2 か所、東西面中央に各 1 か所の計 7 か所あって、それぞれ壁板を落こむ小穴が突かれた方立柱を土居上に立てる。扉の軸摺穴は、B 2 建物と違って敷居がないため、直接土居に穿たれており、かわりに土居上に蹴放がおかれていた。扉はいずれも外方に開く両開きの扉であって、扉板は目遣の栓で締めがされている。南面の開口部は、他の 3 面が 90cm であるのに比べ、中央 151cm、

両脇 127cmと広くなる。南面がこの建物の正面とみられる。出入口の前面には奇観石のように玉石が据えられていたが、今回の調査ではこれの全貌を出土しえなかつた。

建物の中央部には径32cmの掘立柱がありその北方にも12.5cm×2.5cmの角柱や、径32cmの円柱が掘立てられていた。これらの柱は地上30cm内外で切断されており、円柱の切断木口には、鋸が使用された傷跡を留めていた。また角柱には、方立柱と同様に小穴が突かれていた。この建物は梁行方向に床板がはられた建物であつて、土居下面と同高に転根木が敷かれ、また床板も2枚梁行の土居下に遺存していた。床板ばかりとすると、前記の掘立柱は床板上に突出することになる。床板下の地表面では、おびただしいほどに木材の削片が、あたかも敷き詰められているかのように検出されたが、工事中の削り屑か、あるいは意識的に敷かれたものかは明らかでない。土器や木筒はこれらの削片とともに出土している。



第11図

5. 遺構の考察

A・B・C地区で発見された諸遺構は、同一層内から検出されており、同時に埋没したとみられる。これらの遺構の存在する旧地表面は、やや南高北低の傾斜面であるが、黒色粘土質土である点は相違なく、各遺構は同時期のものと考えられる。B2建物とC1建物は同じ構法でつくられ、壁板も同厚であり、また、B1・B2両建物に付設する柵とA2柵とは同じ柵柱が用いられている点も、これらが同一計画の下で建設されたと考える根拠を与える。B地区の北方や、C地区の西南方でも、かって多数の埋没木材が発見されたと伝えられるし、また、B1・B2・C1各建物の開口部と寸法の異なる扉部材（方立柱および蹴放あるいは柵の仕口のあるもの）がC地区で発見されており、ほかにも建物が存在したことが推測される。したがって、この遺跡には一回もしくは前面に柵を設けた建築群が存在したものと思われるのである。

ところで、これらの建築群は、北西より流出した土砂で埋没されたようである。B地区の建物の壁体はいずれも南東に傾いて発見されており、この推定を援ける。遺構が埋没するシラス層から考えると、屋根などの上部の構造材は、すでに流失したとみなされるのである。

これらの建築群は、どのような性格のものかは全く知らない。各建築について、個々の平面から推定すると、B1建物は南に小さな出入口が1か所あるだけで、他は閉鎖されており、倉のような格納施設ではないかと思われる。また、B2建物は、構造的には板倉によく似ているが、開口部が多く、内部に戸縁の設備をもち外から開けないこと、焼痕のある木材が内部で発見されたことなどから、居住用の建物と思われる。B1・B2建物は、軸を描えて配置されており、一对としてつくられたものと推測できる。

一方、C1建物は、B地区の建物とは性格が異なり、B2建物のように居住性の高いものかどうかも明らかでない。開口部が多いことは、この建物を格納施設とみることに甚だ否定的である。内部で発見された掘立柱の使途も問題である。しかし、現在発見された建物のうちでは、もっとも規模が大であって、これら一群の建物では主要なものであることは間違いない。これらの遺構は、伴出する土器から平安時代後期以降のものとみなされるが、巨大な木材を転使につくりあげている点や、柵を構えていることは、当時この地に住んだ豪族の居館に関係するものでないかと想像される。今後この遺跡がさら広範囲に発掘調査されて、遺構・遺物が豊富になれば、その性格が究明されうることであろう。

個々の建物については、上部構造が不明であったので、今までの類似建物の発見例を参照して推定するしかない。

この種の埋没建物については、文化14年(1917)鷹巣町の小勝田(小ヶ田)で発見されたものが構造的にもっともよく知られている。平田篤胤の『皇国度制考』に記されるこの建物は、

「ふたつの家大小あり、大きな方桁間9間梁間5間なり。實に上古穴居の家とも云ふべくや。今の

屋造りとは大きに異にして、地面より軒端の高さ僅かに2尺5寸、家の内地形4尺ばかり掘り下げたり。板敷なし、4方に窓の如きありて左右開きにて板は割板單なり、其下に4尺余の階子あり。此より出入すと見えたり。屋根は割板を敷ならべ杉の皮を葺き其の上にねば上、厚さ2寸5分程度重りかけたりとあって、軒の低い内部が堅穴の家屋であることが知られる。今回発見された建物は、これと比べると、平面規模がやや小さく床も異なっているが、外観は似たようなものでないかと想像される。井籠状に組み上げられる横板の厚さが、5cmほどのものであるということは、柄が入っているといつても板自体が比較的長いものであるから、積みあげても1.5m内外の高さが限度であろうし、軒高もしたがって低いものと思われる所以である。

屋根が割板を並べ、土葺にしたものには、先年調査された男鹿市臨中の堅穴住居があるが、それは割板を斜めに地面にさしてつくられたものと報告されている。すなわち、棒を用いず軒裏が直接板となるものであったのである。杉皮が土を上におく土居葺として葺かれていたなら、棒なしで、棟木と桁に直接割板をわたしその上に流れと直角に杉皮を並べることが可能であり、この地方の住居の屋根構造がこのような土葺を通例としたとみると、今回発見の建物も棒なしで屋根が葺かれたとみることもできよう。いずれにせよ、今回の調査では上部構造が全く不明であって、單なる推測に留まるをえない。(福山敏男、工藤圭章、永井規男)

IV 出 土 品

1. B地区出土遺物

B地区には構造の異なる2つの建築遺構が発見されているが、いずれもC地区に比して土器等の出土点数は少ない。B1建物においては建物内、東面の壁体に沿って机が出土した。この机は長さ160cm、巾45cm、厚さ3.5cmの面に高さ18cmの木脚が2本ついている。(しかし、この机は完全なものではなく片方が欠損している)。B2の建物においては2つの須恵器を出土している。1つはB2建物内の北東隅シラス層から出土し、完全な形をしている。口径が12.5cm、底径6cm、高さ4.5cmの壇であり、ろくろ仕上げの手法、焼成・成形ともに粗雑である。また内外ともに煤によって黒褐色の荒い面である。これは出土地点からみてシラス層上部より20cmの深さから出土したことによって、B2建物に関係したものとは考えられない。

他の1つの須恵器の壇は口縁部が一部欠損している。口径14.5cm、底径5cm、高さ6cmであり、内外は煤により黒色となっている。これはかなり使用されたものとみられ手づれのあとがみられる。ろくろ仕上げのものであるB2建物西扉の踏込みの板の上から出土した。

2. C地区出土遺物

胡桃館C地区遺跡に於ける出土遺物は、須恵器、木器を含めて24点であった。

その内訳は、須恵壇14点、大形須恵鉢1点ならびに須恵壺1点の計16点、残り8点は、横矧、木皿を含めた木器のそれである。

また昭和38~40年度にかけて、鷹巣中学校敷地およびグランド整備した際出土した須恵大甕、土師壺、刀子を含める8点の遺物も今回の調査に含めて報告することにする。

次に、これらの遺物を個々に述べることにする。

(1)須恵器（第12図・13図、1~15）

前述した如く、C地区出土の須恵器は、16点である。（墨書き器を含める）これらをその器形、性格について分類してみると5つの類群に分けることができる。（以後、A~E群と仮称して記す。）

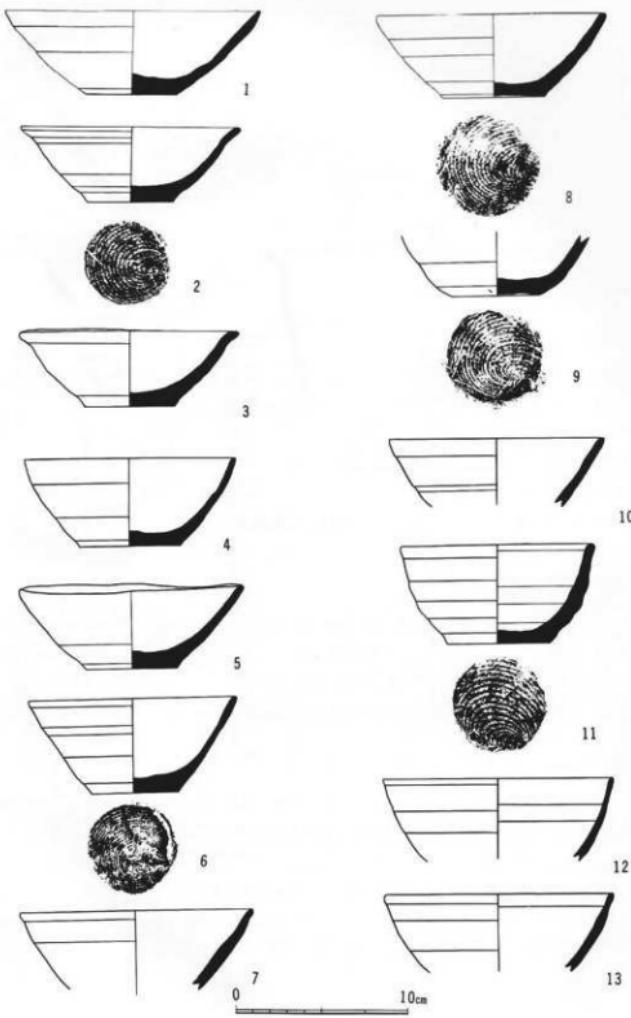
A群（第12図、1~7・10）

いわゆる普通にみられる須恵壇である。

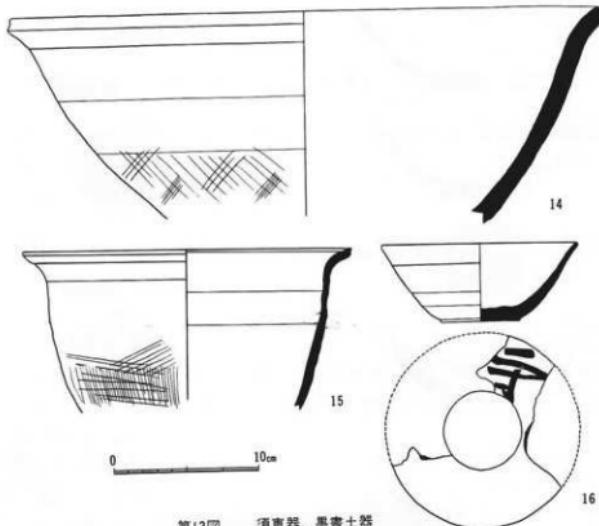
1. 出土した壇中において、13.8cmという一番、口径数の長い壇である。赤褐色を呈し、胎土が粗雑であるためか、いたる所に摩滅され焼成も悪い。底部内面の中央部のもり上りが激しい。ろくろ跡、糸切り跡が明瞭。
2. 黒褐色で内外面とも煤の付着がめだつ。ろくろ。糸切りが右隅中心にある点は、他のものより明確である。内面により2カ所ほど焼けた箇所があり、有機物らしきものが付着した跡がみえる。口縁部の上りが急である。
3. 若干の歪みがみられる黒褐色を呈する胎土の粗雑な壇である。2と同様、内面の口縁部付近に有機物がみられる。
4. 灰褐色、ろくろ跡が明確である。胴部が全体的に丸味をおびている点は、ろくろ使用後、あきらかに刷毛で整形した跡がみられる点で裏づけされる。底部中央部が凸状を呈する。
5. 口縁部に著しい歪みがみられる。口縁部が黒色を呈し、胴部から底部にかけ褐色を呈する。底部内面は、かなり凸面状態をみせている。前述した2・3・4と同様に底部から胴部にかけて「く」の字状の断面を呈する。また口縁部の平面は、卵状の形をみせる。
6. 赤褐色を呈する。胴部の厚みが薄く、他のものよりも若干、高さをもつ壇である。口縁部付近に焼けた跡がみられる。器形全体のもちあがりが急な点に特色がある。
7. 内外ともに黒褐色を呈し、特に内面は、うるし塗りのためか黒光りする。焼成は他の壇より比べて良好なものである。口縁部のみであり、図上復元したものである。
10. 赤褐色を呈する薄手な壇。口縁部のみ。

B群（第12図8・9）

- 8・9ともに薄手な断面をもち、胎土があらいのが目立つ。どちらも黒褐色を呈し、底部には明瞭な糸切りをみせている。また底部が2~3mm前後、あげ底状を呈するのがこの群の特質である。底部内面は、凸状をみせている。



第12圖 須惠器



第13図 須恵器、墨書き器

C群（第12図、11、12、15）

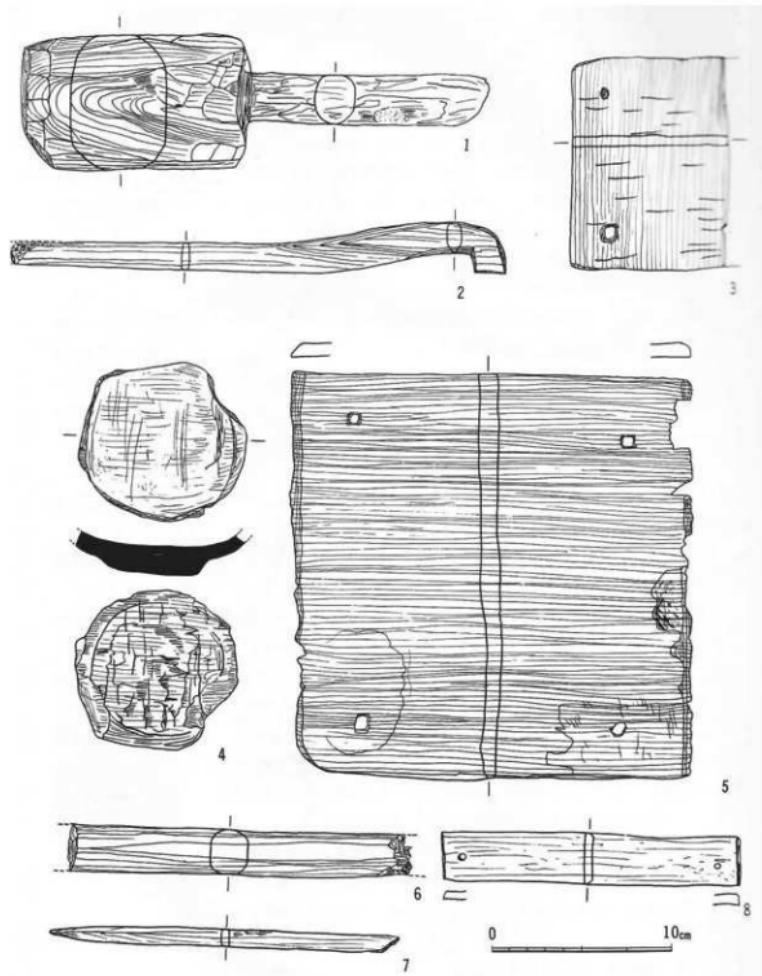
11. ろくろ跡が他のものよりも内外面ともに明確に残されている。また糸切りも他に比較して、若干、幅をもつ状態で切りはなされている。黒褐色を呈する、もち上りの急な壇である。この器形は、男鹿市市立博物館の埋没古屋に3点出土している。良好な焼成である。

12・13は、いずれも赤褐色で薄手な壇であるが口縁部の断面から推測して、11と同型なものとして判断してもよいだろう。

D群（第13図、14）

14. 本遺構の北東部から出土した鉢である。地表下1.28cm、床面に接し50cm程の間隔をもって2カ所にわたって出土したものを復元したものである。口縁部直径40.8cm、推定高さ17-18cm、厚さ1.1-1.3cmの大形のものである。

内外ともに煤の付着がめだつ点に特色がある。底部は不明であるが、胎土は砂、小石状のものが混入し粗末なものである。輪積み方式をとったの作成と思われる。副部下方にはのちに窓で整形した刷毛文様が数条みられる。特に外面上部に煤の付着が著しい点から煮たき用器に使用されていたものと考える。



第14図 木器

E群（第13図、15）

15. 口縁部直径22.8cm、厚さ0.5~0.8cm。黒褐色を呈する。本遺構の南部土居付近から、床材をはさみ2群に分れて出土した小破片を復元したものである。胎土、焼成ともに粗雑であり、土、砂のつぶ状が内外面ともに浮き上がっている状態を呈する壺の器形である。

特に胴部から口縁部にかけての黒色が目立つ。胴部は窓で整形した痕跡を残し、口縁部は薄手である。断面の中心は、黒くなつており内外の表面は灰色を呈する。

上ぬりとしての作成かとも考える。表面の凹凸が激しい粗末な須恵器である。

(2)墨書須恵器（第13図、16）

灰褐色を呈し、外面はロクロ跡が明瞭でA群に属する壺である。底部の「く」の字状の形式から自然に口縁部に移る型を示す。胴部に力強い字型で「守」の墨書きがみられるが、2画目の先端と末尾とが若干欠けているので完全なものではないにしろ、秋田県下ではこの種の字型が始めてである点と、米代川流域で発見された唯一のものである点から非常に貴重なものであると考える。なお、その意図する点に関しては今後の研究課題にする。

(3)木器（第14図、1~8）

1. 構である。床面に接し、須恵壺らと一緒に地點に出土した。全長26.5cm。柄の断面は丸味をおび13cm前後の長さをもつ。4隅を削り使用しているためか腐植が激しい。県下でも唯一のものである。

2. 厚さ0.5~1cmの薄手な木製品である。先端をくの字状に削り取っている精選された木器で、用途不明ではあるが特異な出土品である。

3. 縱、横とも12cm前後の正方形を呈する木製品である。厚さ0.5~0.8cm。4隅に直径0.5cm前後的小穴を穿っている。（右上のもの不明）左上の穴には同質の木釘がみえる。

4. 木皿の底部である。腐植が激しいが底部の断面から考えても、さほどの高さを持たぬ木皿と考える。内面（上図）では規則な刃物でつけられたと思われる刻線が縱横に数本みられる。

5. 杉材。縱横22cm程の正方形を呈する木製品であり、3のものを大形化したような感じである。4隅に穴を穿っているのも同様である。図の左上に墨書きがある。また裏側中央部にも2~3行の墨書きがみられるが、その字型ならびに内容は不明である。右中央部に若干の焼け跡がみられる。床面に接しての出土遺物であるが水路作成の擾乱層によって腐植が激しい。

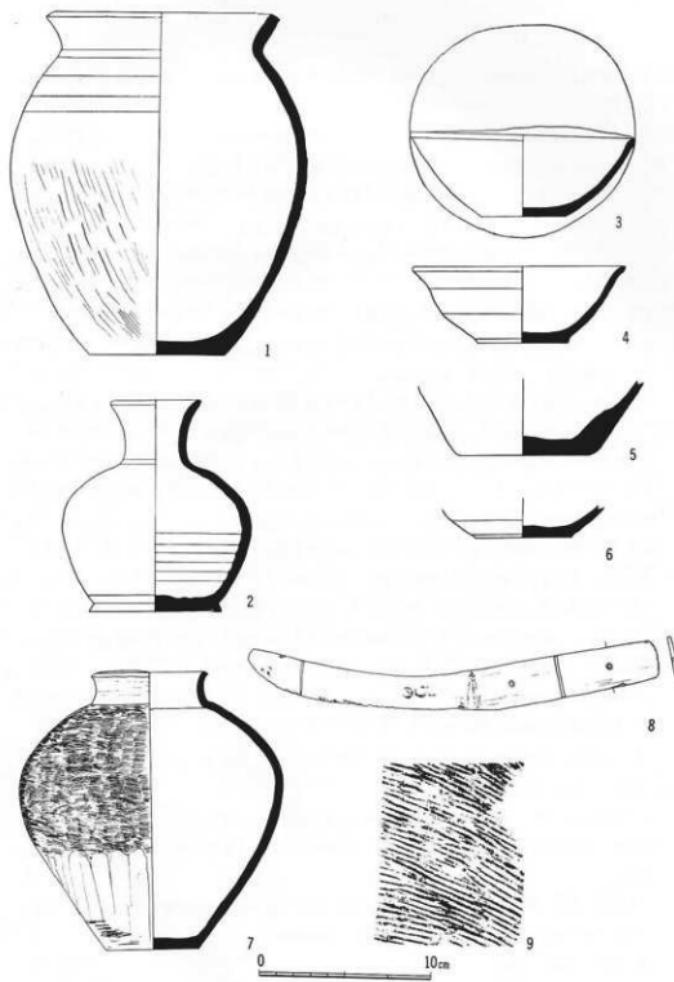
6. 丸味の断面をもつ、表面をきれいに削りとっている木製品である。ある種の柄か？。

7. 全長20cm、幅1cm、厚さ0.5cmの串状の木製品。先端が鋭いV字状を呈する。

8. 長さ16.5cm、幅2.5~3cm、厚さ0.5cmの両端に小穴のある木製品である。

3. 昭和36~同40年度出土遺物（第15図、1~8）

1. 土師壺であり、完形品である。口縁部直径13cm、底部6cm、高さ20cm。口縁部から胴部上方にかけ、



第15図 須恵器。刀子

- 31 -
寄40072

ろくろを使用。また胸部中央から下方にかけ、右下りの刷毛目文様がみられる。黄褐色で胎土、焼成は粗雑である。

2. 須恵塊。比較的長い頸を付けたもので、内面におどこされたろくろが明瞭である。底部は、「く」の字状の断面をもち高台を呈する灰褐色の器形である。焼成、胎土とも良好。

3. 瓢みのある須恵塊である。口縁部の断面は、若干の丸味を呈している。またその平面は団の如き卵状の不整円形を示す。内面には2カ所、黒褐色の付着物がみられる。

4. 赤褐色の須恵塊である。底部がA群の2・4・5と同様に垂直に近い断面を呈し、口縁部に若干の外反がみられる。

5. 須恵塊の底部。焼成上からか非常に凹凸が激しい。黄褐色を呈する。

6. 黄褐色を呈する底部のみの須恵塊である。ろくろ、糸切り痕跡が明瞭である。

7. 大形須恵器である。（9はその器面の拓本）

口径21.7cm、底径17cm、高49cmの大形器形を呈する須恵器である。外面の胸部には、たたき目の文様を呈し、その内側の表面には青海文様を示す典型的な須恵器である。

完形品である、器形である点は県下唯一なるものである。底部付近は若干のゆがみがみうけられる。

8. 刀子

長さ24cm、最高幅2cm。柄には0.2cm～0.3cm程度の目ぐき穴が5.5cm間隔をもち2カ所ある。○印の押文の如きものがみられる銘入りの刀子であるが細紳な点は不明である。

そりのみられる点から時代が若干くだら遺物ではないだろうかと考えられる。

これらの遺物は殆んどグランド中（A地区）より出土したと伝えられている。

以上で出土品の概要を述べたが、一般に塊類の多く出土した本遺跡の遺物に関する特質は、次の3点である。

①. 胎土、焼成が粗雑であること。

②. 煙の付着した黒褐色の塊が多いこと。

（の用途は、食器用のものもあるが、概して煙が付着している度合から油皿もしくは煮たき用の用途とも考えられる）

③. 墨書（16・「守」、木器5）に特異性があること。特に「守」の出土は県下に於いて始めてであり、秋田城、男鹿市脇本の埋没家屋との関連性によき資料となることは疑いの余地のないものであると考える。

第2次調査に於いて床面との関係、遺構周辺の探索により、確実性のある遺物の占地を明らかにすることが今後に残された重要な課題であろうと考える。（鍋倉勝夫）

4. 権 物 体

郷土の古い文化を充実するために、鷹巣町胡桃館地域の第1次埋没建物発掘調査は、7月26日より8

月15日まで、引続く炎天下に、厚さ1.5メートルの固結状態にあるシラス層を、約400立方メートルを発掘排除する作業を伴って行われた。先ずこの作業に従事された人達労苦に対して謝意を表したい。

はからずも報告者は、この調査團に加わる機会を得て、幾百年前のある日、突然に起きた自然の威力の猛威に絶えず、またたく間に厚いシラス層下に没したと思われるたくましい建造物を見て、自然の偉力と古人の技術に驚異を感じるとともに、またその場面は現代人に対して、何にか暗示しているよううにさい感ぜられたのである。

この調査において出土した植物体は、多くはなかったのであるが、建物に関する以外のものは、断片的なものが多く、同定については困難の多いものであった。ここに判明し得たものを、分類体系の順によつて、所見を添えて報告する。資料の蒐集についてお世話になった團長初め諸氏に対して、深く感謝の意を表する次第である。

1. シギ *Cryptomeria Japonica* D. Don

土居・扉・柱・堀立柱・根太・床板・壁板・豎板・さく・削木片・机・木簡。

B 1建物豎板は、約厚さ3cm、巾20cmで、上端はくし歯状に腐食し、板目または追目の板で、割裂によって作られたもので、木表を外側にしてあった。

B 2建物の壁板は、約厚さ3cmあって、殆んど板目で、少數をのぞいては、木表を外側に用いてあつた。

C建物の土居は約12m×9m、断面は約30cm×39cmある巨大なもので、当地方の木橋の桁材を思わせるものであった。その両端には、1対の目度穴があり、さらに1端に、目度穴の反対側は、斜に削られていた。これらの加工は、この材を山取りして、現場より索引して搬出するためのものであろう。

この原木は、樹高30m以上あり、胸高径が1m近くあったと推定される。

削木片は、C建物の土居や根太の下にあり、何れにも刃物の跡が認められた。これらの削木片は、根太とか床板とか壁板などの製版によって生じたものであろう。

スギを多量に利用していることは、この樹種が附近山地に多く、耐久性が強く加工容易なことによると推定される。

2. ハンノキ *Alnus Japonica* Sieb. et Zucc.

葉片・ケヤキの項に詳述する。

3. ブナノキ *Fagus Crenata* Blume

樹皮の小片。樹皮の小片。

C建物の床土より分離したもので、約5cm×2cmの小片で、現存するブナノキの樹皮と比較同定した。

4. クリ *castanea pubinerris* Schmid

柱・ぬき柱

柱はB 1建物に見られた堀立のものであった。隅の4本は約径15cmあるほぼ八角形で、他は角材で17cm×10cmで上端部分がやや細くなっていたが、これは屋根の構造に何かの関連があるものであろうか。

ぬき柱は、B1とB2の建物の東側の隅にあって、対をなして建てられている。太さは15cm×10cmあって、上部は腐食していた。これと同じものが、B建物の南面東隅に一本あった。これらに、14cm×9cm位の長方形の穴が、間隔25cm位にうがたれ、3段だけ残っていた。この穴にぬきが渡されていたと考えられているが、B2建物は一本だけとなっているのは、これに対をなすものが未発見か、それとも別の用途をもっていたか不明である。

A地域のさくは、スギを材料としているがB1とB2の建物の間のような構造であるが、これらは、当地方山間部の稲架の構造に似ているのは興味深い。

5. ケヤキ *Zelkova Serrata Makino*

杯・木片・葉片。

杯は部分的のもので、B1建物より出土した。全体炭化しているものであった。木片は約長さ2cm、厚さ巾とも1cmのもので、排除したシラス中より蒐集したものである。両端には刃物の跡が認められた。

葉片はハンノキのものと同じく、緑色であって、C建物内部のやや北東部に偏する部分の、床面より30cm上部より出土した。これらの葉片は、何れも水平位をすることなく、南方に湾曲面をむけ、の凸面はほぼ垂直位にありた。これらはシラス泥流が、平面に対して転回状の運動をなして、建物内に侵入し泥とともに沈積したものと推定される。緑色は葉綠素によるものであろう。出土後多少褐色に変色した。葉綠素であるとすると、この洪水は晩春から初秋の間に起ったと考えられるが、降雨をあわせて考えると、夏期に限定されるであろう。

田代町早口字坂地のバス停留所附近に、直径1.3mのケヤキの大木の株がある。この株は、新国道開通の工事によって、胡桃館のシラス層と対比される層から現れたものである。さらにこの近くに、他にヤナギ属の径40cm内外のものが二株あったが、国道整地によって、再び土中に没するにいたつたのである。これらの株は、上端はくし歯状に腐食していたが上部のシラスの堆積の状態からして、株の上部の幹部が、すでに、堆積当時には無かったのではないかと推定される。なお、この附近の井戸掘りに際して、シラス層から樹木の株が出るといわれている。

6. イタヤカエデ *Acea Pictum Thunb*

木つち。

B1建物より出土し、長さ25cm位で、著しく腐朽していた。

7. ノリウツギ *Hydrangea Paniculata Sieb*

幹の一部

約長さ15cm、径2cmあって、一端は炭化し、他端は折れた状態をしてあった。おそらくは、たき火の焼け残りであろう。排除したシラス中より蒐集したものである。

8. 木 炭

木炭は、B2建物の南面壁の外部、1.3mの深さ、建物の土面と同一の深さの部分より出土したもの

である。大は長さ5cm×径3cm位で、他は小片であった。10個余が同一個所にあったものであるという。これらの木炭は、たき火の燃え残りの炭の如く、軟質で不規則の亀裂はなく、硬質で断面は貝がら状をした。これによって、如何なる方式かによって、附近において製炭が行われていたのであろうと推定される。（松田孫治）

V む す び

昭和42年度の胡桃館埋没建物遺跡の調査は、予期以上の成果を収め、三種の建物が発見されさらに南部に低い垣状の柵が廻ることが知れ、出土遺物より平安中期の土豪の居館かと推測されるに至った。これらに関する文献上の明説は欠けているが、江戸期の米代川水系の古代建物発見記事等から、大館市及び以西の建物発見記事は胡桃館発見建物と類似する点が多く、また男鹿市発見家屋群も、この点類を同じくする。たゞし胡桃館B2・C建物の如く、土台上に扉や板壁の残存した実例は、県内に於いても最初の発見例であり、全国的にも稀有な例證である。そしてこれらの遺構が伴品遺物から今のところ平安中期の土豪の居館とされ、今後の精査によって本遺跡の性格が漸次明らかになること、考えられる。又、この遺構の保存、復原等に關しても今後の重要な課題として考究さるべきであろう。（奈良修介）



1



2



3

1. 挖立円柱列（東） 3. 挖立構列（38年度調査）

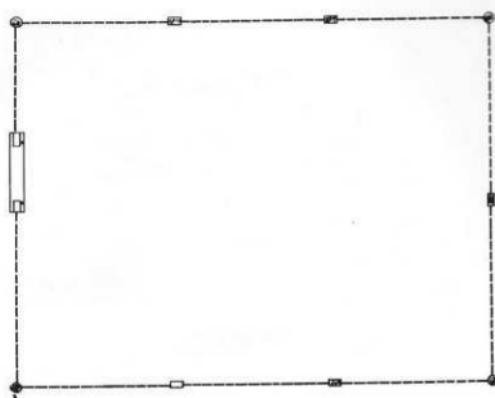
2. " (西) 4. 貫材の結合部



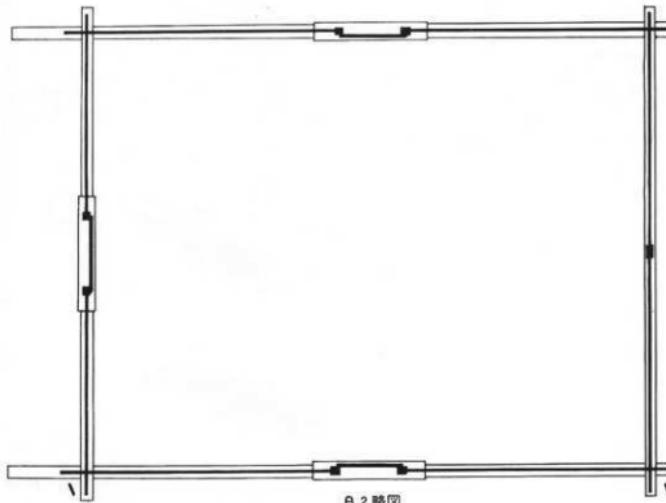
4

第16図

A 地区写真（豊島写）

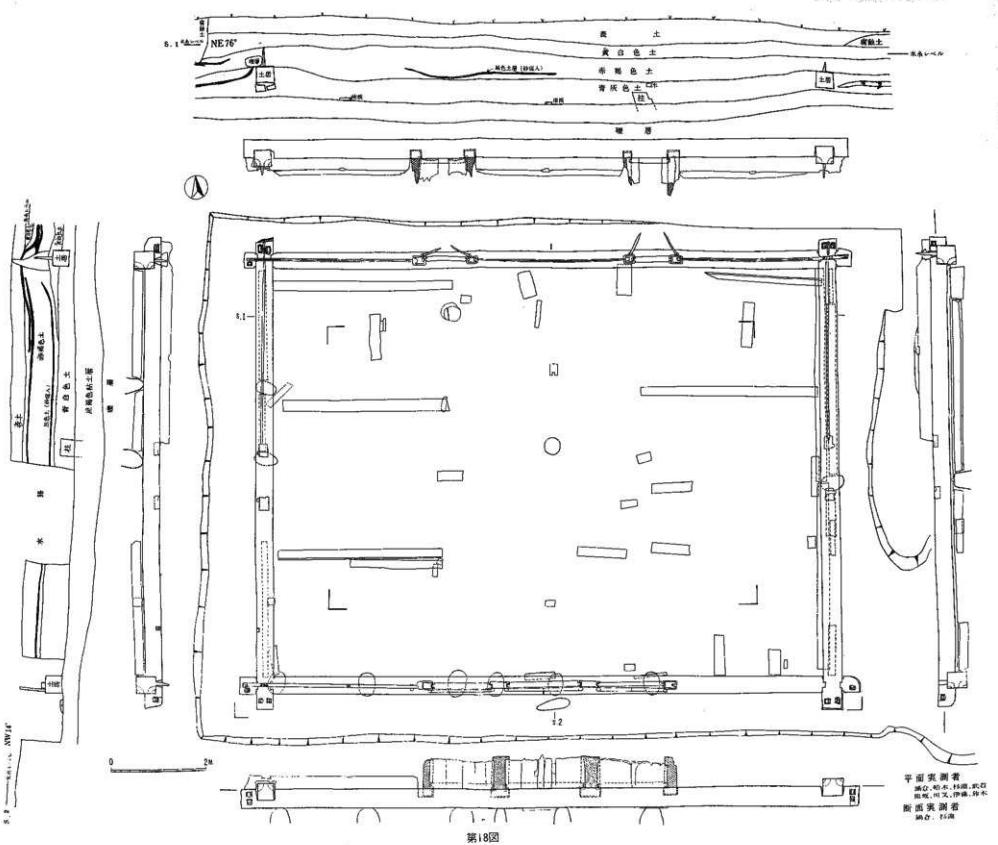


B 1 略図

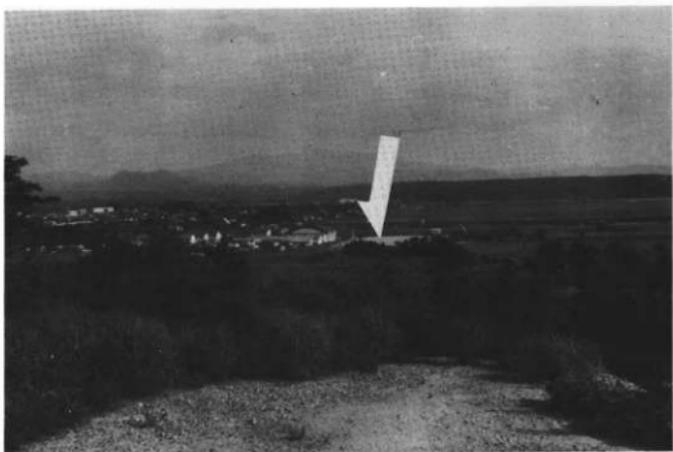


B 2 略図

第17図 B 地区建物平面図 (工藤図)



第18回

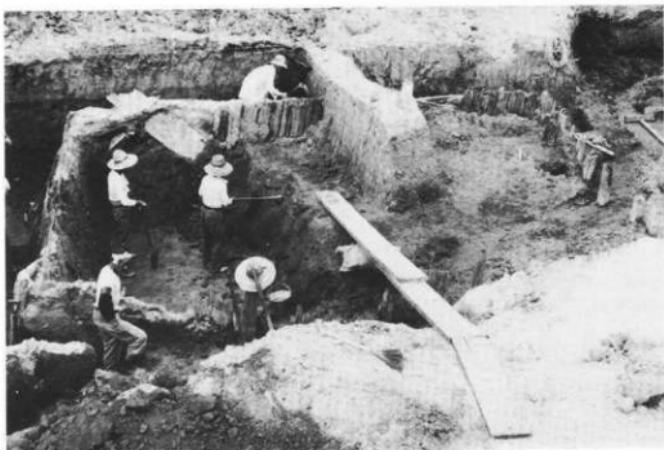


胡桃館建物埋没遺跡遠景、北方より写す。



江戸時代家屋が出たと伝えられる小ヶ田部落を北方より望む。

図版2



B I 地区発掘風景、西方より写す。



C 地区発掘風景、東南より写す。



写真中 B 1(上)、B 2(下)建物遺構



B 1 建物遺構の扉の状態、内側(北方)より写す。

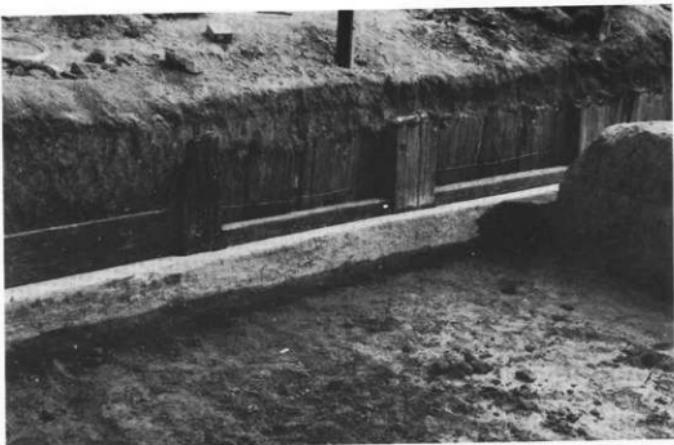
図版 4



B 1 建物遺構、東北より写す。左上端はB 2 建物遺構



B 2 建物遺構

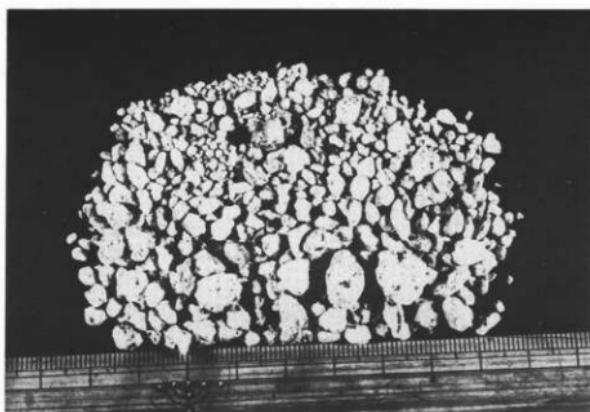


C 地建物遺構、南面屏の様子を東北より写す。



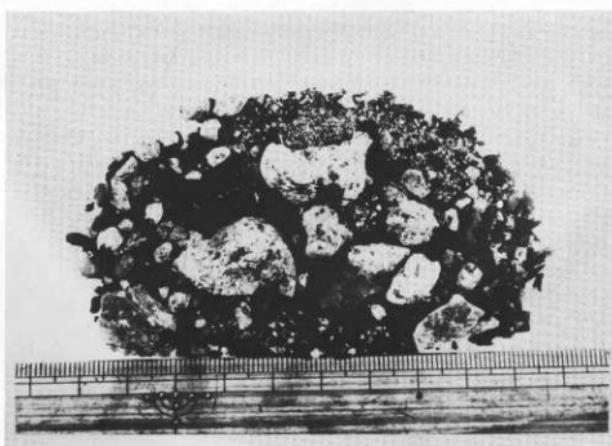
C 地区建物遺構、北側の状態を東方より写す。

図版 6



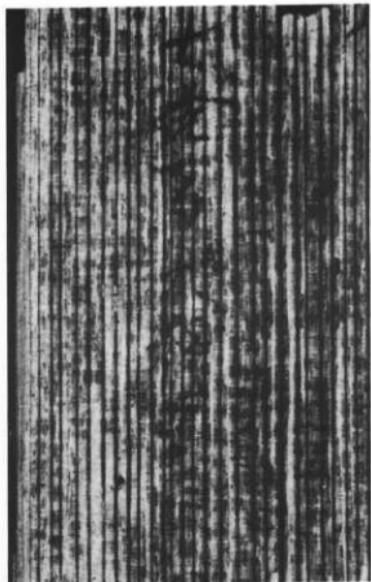
胡桃館埋没建物遺構を埋めたシラス層の軽石片 中上部

(藤岡写)

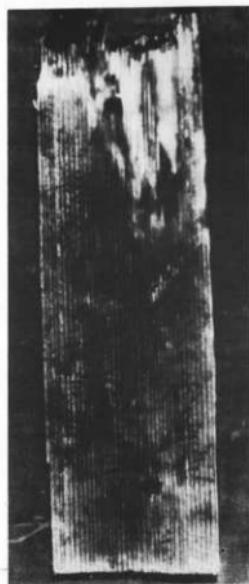


胡桃館埋没建物遺構を埋めたシラス層の軽石片 基底部

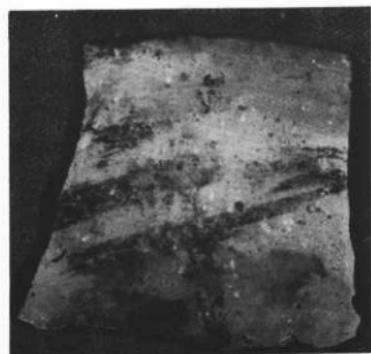
(藤岡写)



1



2



3

1. 2 は同一個体で

ある。C 地区出土の

墨書のある木器。

3. は C 地区出土墨

書土器「守」

(以上秋田県警鑑識課撮影
赤外写真)

編 集 後 記

本県では、全国でもめずらしい埋没家屋が男鹿市臨本で発見され、考古学、古建築学界の注目をあつめたが、続いて鷹巣町綾子くるみ館から、今まで出土例のない35cm×39cmの角材の土居、5cmの厚さの壁板などを使用した巨大な建物遺構と直径70cm長さ3.9mの円柱の獨立柱など平安期の建築を知るうえに貴重な遺材が出土した。ところが、土木工事の施行のため遺構が破壊にひんしたため、緊急的に42年の夏調査に着手した。

発掘調査には、遺構の中心部の用水路の排水作業に予想外の困難が伴ない、また、シラスの堅い地質のため発掘担当の方々の苦労は大変なものであったが、文化財保護委員会の工藤圭章技官の適切な指導と現地の町間係者の協力のお蔭で無事調査を終えることができました。第2次の調査には、この経験を生かして実施いたしたい。

なお、この報告書の刊行に当って、岩手大学関係者をはじめ県内外の調査員各位の多大のご支援があり、また、編集に秋田県文化財専門委員奈良修介氏、秋田県立美術館学芸員富樫泰時氏の苦労をわざわざしました。ここに深く感謝する次第であります。

昭和43年2月

秋田県教育庁社会教育課

加賀谷 辰雄

吉川 欣一